

人格神の習合を考える

－アイヌ・朝鮮の類話を手がかりに－

北原 モコットウナシ

はじめに

日本列島北部の先住民族アイヌの伝承に語られる人格神は、アイヌの信仰における他の神々とは振る舞いを異にする神格である。人格神の伝承には「隣の爺型」や「兄弟譚」のほか、魔物退治、世界の創造や人間創造、文化起源など幅広いテーマ・話型が含まれる。北海道南西部の日高地方沙流川流域では兄弟譚ではオキクルミとサマユンクル、文化起源譚ではアイヌラックル、世界の創造コタンカラカムイ（世界の創造）など、それぞれのテーマによって、異なる神格が主人公となる。一方、北海道中部の石狩地方では、それらの多くがサマイエクルの物語となっている。

人格神をめぐるこうした地域差に対し、先行研究では習合（金田一（1923））と分化（知里（1952））の2つの視点から論じられてきた。本稿では、アイヌ社会内部での変遷を論じる他に、近隣民族の類話との比較を通じて考える視点を提示し、人格神の習合について再検討する。

1. 人格神について

知里真志保は「呪師とカワウソ」(1952)などの論考のなかで、アイヌの考える神格を自然神と、「人間の始祖たる半神半人の英雄神オイナカムイ（＝アイヌラックル＝オキクルミ）」に大別している。アイヌの考える神格は、いずれも本質においては人間と同じ姿をしたものとされるが、そのうち自然神は人間界に現れる際に動物、鳥、魚類、昆虫、草木、山川、火、水、天体、器物等の様々な事物に姿を変える。これらは文学にも現れ、また日常生活においても信仰・祭祀の対象となってきた。

これに対し「オイナカムイ」、「アイヌラックル」、「オキクルミ」等と呼ばれる神格は、神界においても人間界においても常に人の姿のまま振る舞う点が特徴的である。知里はこの点について「アイヌの神といえたいてい実体があり、例えばキムンカムイ（kim-un-kamuy 山の神）は熊、レプンカムイ（rep-un-kamuy 沖の神）は鯨、【中略】という様に、それぞれはつきりした実体をもっているのに、この神はその点になると模糊として歴史のあけぼのの霧の彼方に隠れてしまうのである」と述べている（知里 1952（1975）：195）。

また、人格神は人間や文化の起源において重要な役割を果たしたとして尊崇を受ける一方、沙流川流域などを除く多くの地域では祭祀における祈願の対象になっていない⁽¹⁾。

なお、先行研究では「人文神」という言葉も用いられてきた。これは人格神の「文化創造神」としての性格に注目した語だが、人格神の行為は文化創造にとどまらない。また、知里は「オйнаカムイ」と他の神名を等号で結んでいることからわかるように、こうした複数の行為を1つの神格による物と考えたが、本稿では、それぞれの行為を担った神格を別個のものとして考え、それらの総称として人格神を用いる。したがって、人格神は、人文神を内包する広い言葉として用いる。

2. 先行研究

2-1. 人格神伝承の類型

金田一京助によれば、人格神についての記述は正徳年間（1711年－1716年）の文献や、享保5年（1720）年にまとめられた新井白石の『蝦夷志』に既にみられるという。以後の記録に見られる人格神には、いくつもの顔がある。人格神の行為として金田一（1923）や知里（1952）に示された物をまとめると次のようになる。

・創世神、人祖または人間創造—しばしば巨神として語られ、土を手足でかいて山川を創ったと言われ、また体の一部（分泌物や衣服）から動植物を生むなど「世界巨人型」に類する伝承もある⁽²⁾。世界を創った後に動植物をも創り、さらに人間を創造した、あるいは人間の始祖となったともいわれる。人間を含む動物の繁殖期を定めるなど、自然界の摂理（世界の秩序）を定めたともいう。

・文化創造—文化を授け、あるいは最初に実践して「人間生活の元を開いた」という。

・魔神退治—文化起源譚などと結びついて、人間界を脅かす魔神を退治する伝承。秩序を乱そうとする者を除いたという意味で、やはり秩序創出の話の1つと考えられる。

・兄弟神—人格神は文武や人格に秀で、またしばしば相反するパートナーを伴う。パートナーは兄であることも多く、兄が仕損じたことを弟が成功させる愚兄賢弟型をとる。

これらのうち、魔物退治や文化創造の要素は、少年英雄を主人公とする英雄詞曲と共通するものがある。また、愚兄賢弟譚は、パンンペ・ペナンペという兄弟を主人公とする隣の爺型の物語群との類似を思わせる。もっとも隣の爺型とされる伝承は、さきに弟が何かで成功をおさめ、それを妬んだ兄が真似て失敗するのを常としており、人格神の愚兄賢弟譚とは構成が逆転している。

2-2. 人格神の名称

人格神は様々な名を持つ。知里（1952）に挙げられた神名と職能は次の通り。

1. コタンカルカムイ

2. コタンヌクル（千島・創世・巨神）
3. アイヌラックル（胆振・日高沙流 文化神・人祖）
4. オアイヌオルシクル（北見 創世・人祖）
5. ワリウネクル（胆振・日高沙流）
6. ヤイレスポ（樺太東海岸 人祖）
7. アエオイナカムイ（日高沙流）
8. オイナカムイ（日高沙流）
9. サマイクル／サマイェクル／サマイェカムイ（石狩・十勝・釧路・北見・天塩・樺太）
10. オキクルミ（日高沙流）／オキキリムイ（胆振）／オキキリマ（石狩・十勝・釧路・北見）

上記の名称は全てが別個の神格という訳ではなく、いくつかの名称、属性が同一の神格に結び付けられていることがある。たとえば日高地方沙流川流域では、オキクルミと3、7、8は同一神格の別名だとみなされている。ただし、愚兄賢弟譚には必ずオキクルミの名で現れ、サマユンクルをパートナーとする。つまりこの4つの神名は同一の神格を指すとされているものの、実際には「アイヌラックルとサマユンクル」や、「オイナカムイとサマユンクル」といった組み合わせは起こらない。ここから、アイヌラックルなどの神名は、特定の話型と結びついていることがわかる。

なお、愚兄賢弟譚でオキクルミが成功を収める話は北海道の南西部に集中し、東北部ではこの関係が逆転して、サマイェクル系の神格が賢弟の位置にいる。さらに、石狩地方旭川などの地域では、サマイェクルは創世神とも同一視されている。この点は、オキクルミが創世神とは見なされないことと対照的であり、単純に東西でサマイェクルとオキクルミの役柄が入れ替わっているとも言えないのである。また、サマイェクルは、樺太ではヤイレスポと同一視される。

2－3. 習合と分化のモデル

前節で見たように、人格神には複数の神名と属性があり、地域によってはそれぞれが別の神格と考えられ、あるいは1つの神格の別名と考えられている。金田一・知里は、こうした錯綜した状況が形成された経緯について、ことなる見解を述べている。

金田一（1923）は、日高地方沙流川の伝承をベースに、次のような過程を描いている。
・アイヌラックルとオキクルミはどちらも宗教的神話に登場するため、後者が前者に引き寄せられて混同された。

・オキクルミは、サマユンクルをパートナーとする兄弟譚にも登場する。こうした話型は、隣の爺型をとる一連の説話「パナンベ・ベナンベ」譚の影響を受けて成立。

・アイヌラックルを主人公とする魔物退治の話から、英雄の闘争を描く英雄詞曲が生ま

れた。

つまり金田一は、人格神が隣の爺型の説話や英雄詞曲の主人公とストーリーを共有する理由として、①アイヌラックルとオキクルミの習合、②オキクルミとペナンペの習合が起り、アイヌラックルの闘争的な話から英雄詞曲が派生したと考えたのである。アイヌラックルとオキクルミが習合したとする想定は奥田（1996）でも指示されている。

これに対し、知里（1952）ではオキクルミ、オйнаカムイ、サマイェクルなどの語源解釈から、これらの神名がいずれも古代のシャマンに由来するものと述べる。知里や金田一は、神謡というジャンルがシャマンの託宣から発生したと考えていたのだが、さらに知里は人格神が神謡に登場することも、シャマンと人格神を結びつける傍証になると考えた。古代社会に存在したシャマンをモデルとして人格神のイメージができ、やがて神格が分化していく中でそれぞれの伝承と結びつき、別個の神格として確立した、というのである。

3. 人格神伝承の事例と地域的傾向

人格神伝承の事例を示し、ついで人格神の地域ごとの名称等を整理しておく。先行研究では北海道南西部や中北部の事例を中心に上げて来たので、ここでは吉田巖の記録に基づき南東部十勝地方の事例を要約して紹介する。アイヌ語の表記は原書の通り。

①音更：シャマイクルは昔この十勝の国を造った。国造りを終えて去ろうとするときあとの一切のことをアベカムイ火神、ウオロケウンカムイ水神、コタンコルカムイ産土神の三神に託した。

②帯広：北海道は、コタンカラカムイとサマイクルカムイとが造った。2人はモシリケシ（上ノ国）から造り始め、モシリパ（知床）で終った。中を造って2人は仮に動かして見たら、ゆらいでひびが出来た。持参の鍋や斧などの金属を溶かして、そのひびに流し込んだ。それが、今山から出る金物である。

③音更：兎の由来。昔ボイシコツベとシャマイクルとが雪中で互に雪投げをやった。その雪塊が化して兎に化った。兎は多くの獣の中にてアイヌの最貴重なものとしてあるのもボイシコツベやシャマイクルなどの賜であるからだ。明治40年1月29日。

④芽室毛根：昔、シャマイクルが妹を箱に入れて海に流すと、北海に流れ着き、狼に拾い上げられて夫婦になる。そこで生まれたのがアイヌの祖である。

⑤音更：漁具、猟具その他食べ物でも何でも大切な物はみなシャマイクルやボイシコツベからアイヌが教えられたのである。今生きているかも知らぬ。カムイになって天にいらだろう。やはり人間であったろうか。恐ろしいことはツブカムイ日月神ほどおそろしい。サマイクルの方は別して恐ろしいものであった。明治40年3月30日。

⑥帯広：ふくろう神が歌いながらボンオキキリマの村に行くと追い返され、ボイサマエには歓待される。サマエクルの村に狩をあたえ、ボンオキキリマたちを餓死させた。

⑦芽室：鳥神が歌っていると人間の子供がまねをする。鳥は腹を立て水源地で水を飲み干したので神や人がたくさん死ぬ。そこへオキクルミがきてこれを知り弓矢で射るがすべてよけたので怒って帰る。サマイクルがきて腹の真ん中を射られ、失神して木から落ちる。気が付くとサマイクルが私を踏みつけようとしながら、水を戻せば許す、戻さねば地獄へ落とすというので水を戻した。

①と②は世界の創造、③は動物の創造、④は犬祖説話の形をとった人間創造、⑤は文化創造、⑥と⑦は愚兄賢弟型である。このように、十勝地方ではサマイクルが世界をはじめとする諸物と文化の創造に関与し、愚兄賢弟型では優位に立つということがわかる。ポイシコッペは英雄詞曲の主人公の1つである。同地方の英雄詞曲ではオタストウンクルも主人公となる。

表1に、地域ごとの人格神の職能と名称の相関を示した。旭川と十勝で、特にサマイクルが広い範囲をカバーし、沙流川との顕著な違いがわかる（図1）。

	沙流	旭川	美幌	釧路	十勝
国造り	k	s (k)	k (oa)	s / k	s
文化・秩序	a (ok)	s	k (oa)	ot	s / poys
人祖／創造	a (ok)	s	k (oa)	s	s
愚兄賢弟	ok > s	s > ok	s > ok	s > ok	s > ok

表1. 人格神の神名と職能の相関

a：アイヌラックル系 ok：オキクルミ系 s：サマイクル系

k：コタンカラカムイ系 oa：オアイヌオルシクル系 ot：オタストウンクル系 poys：ポイシコッペ系

() 内は同一神格の異名、パートナーは「/」で区切る。愚兄賢弟型において優勢な方を「>」で示す。

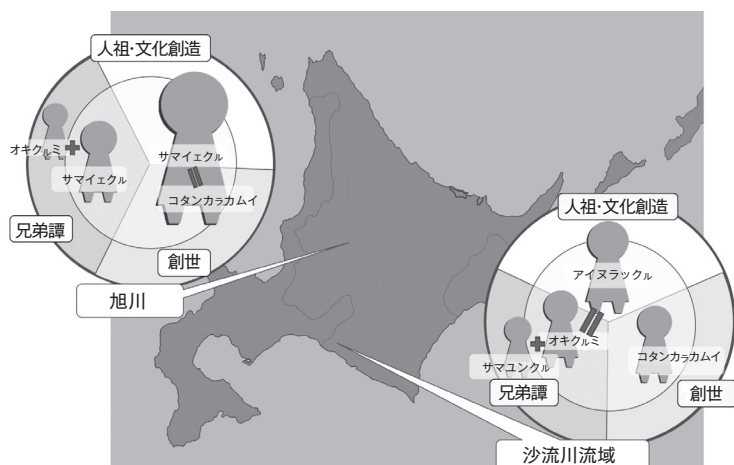


図1. 人格神の名称と話型

4. 近隣民族の事例

アイヌと近隣民族の口承文芸に、しばしば類話が見られることは吉田（1957）や関（1981）などによって指摘されてきた。

前節④の犬祖説話もその1つだが、他に例を挙げれば、知里が紹介している登別市幌別の「パナンベ放屁譚」は、和人の「鳥呑み爺」、朝鮮・中国・ミャンマーの「甘い糞」の類話である。また、日高沙流川流域の、イワンレクトゥッペ（6つ首の化物）を臼、杵、カニ、針、ハチ、クリが退治する神謡は、和人の「柿争い」と類似している。そしてこれらの話はさらに、朝鮮・中国の「虎退治」と類話の関係にある。稲田ほか（2011）によれば、さらに北米のネイティヴアメリカン、カムチャツカのチュクチ、アムール川流域のナーンイ、モンゴル、ベトナム、ミャンマー、インドネシアにも類話が分布している。三浦（1996）はアイヌと和人の小鳥前生譚を比較したが、立石（2004）での検討を参照すれば、アイヌ・日本・中国に小鳥前生譚がひろがり、内容も共通することがわかる⁽³⁾。

人格神の伝承にも、近隣の民族に類話が認められるものがある。類話を見比べると、各話型における主要な役柄には、各伝承地において優勢な神格などが当てられている様子がわかる。次に、それらの事例を挙げる。

4-1. 「神女との婚姻（天人女房）」

B. ピウスツキは樺太東海岸で次の様な伝承を記録している。

狐児の少年がヤチダモの木の下で、ワシ神の夫婦に育てられている。あるとき、ワシ神夫婦の会話を聞いた少年は、夜なかにそっと出かけ、神々が遊ぶ不思議な場所に行く。そのなかで、もっとも美しい少女の衣を隠した。すると少女は、他の神々が去ったあとも帰れずにいた。少年は少女を連れ帰り妻にした。（樺太東海岸 金田一（1923））

日高沙流地方に同じく、若い人格神が神女を娶る話がある。

養姉に育てられているアイヌラックルが、ある晩、神々の集う園へ出かけて美しい少女を見た。その衣を隠したが、少女は去ってしまった。後日その少女（天の主神の妹）が天界で床に臥せっていることを聞いて天界へ上り、黄金に輝く天の主神の家へ行った。聞くと少女もアイヌラックルに惚れて恋わずらいになっていたのだという。兄神は、婚姻を認めるための試練を与え、6人の情歌の歌い手、6人の詞曲の謡い手を呼び、情歌と詞曲がすべて終わるまで、笑わぬよう命じた。それを乗り切ると、次は聞き覚えた情歌と詞曲を全て地上に伝えるように命じられた。アイヌラックルはこれもこなして少女と夫婦になった。（日高地方沙流川流域 金田一 1923）

本州や奄美、朝鮮半島に見られる羽衣説話、あるいはアイルランドのアザラシ女房などは、上記の2篇の類話と見ることができる（稲田ほか 2011）。次は朝鮮の例。

母と二人で暮らす貧しい若者の前に、猟師に追われた一頭のシカが現れ助けを求めた。若者はシカをかくまい、シカは礼として妻を得る方法を教える。シカに教えられたように山上の大池に行き、沐浴している仙女の肌着を隠して家に連れ帰った。やがて3人の子が生まれた頃、妻は男を酔わせて肌着を取り戻し、3人の子を連れて天に去った。男はふたたびシカに教えられて天に行き、妻（天神の娘）たちと再会した。以来天でくらしていたが、老母の様子を見に地上に戻った時に、妻の言いつけを破ってしまい、天に戻れなかった。（孫（1930）⁽⁴⁾）

和人の伝承は、結末部分にはいくつかのバリエーションがあるものの、これとほぼ同じ筋である。アイルランドの話も同様で、漁夫が海から現れた女（アザラシ）の毛皮を隠して妻にし、やがて成長した子供が偶然アザラシの毛皮を見つけたことから、妻はアザラシに戻って去るというものである。

4-2. 穀物盗み

人格神が文化を生んだモチーフの1つに、神界から穀物を持ち帰る「穀物盗み」がある。稲田・小澤（1989b）によれば、日高地方の沙流川流域ではオキクルミ、日高東部の浦河町ではアイヌラックル、十勝地方の芽室町毛根ではサマイクルの伝承が伝えられている。日高沙流川流域の事例を示す。

コタンカラカムイが創出した世界は、天界をもしのぐほどの美しい場所だった。人間界を治める者を決めるに当たり、神々の間で争いが起こった。オキクルミは有望視されたが、これをねたむ他の神々が極寒と酷暑の試練を与えた。これを乗り切ったオキクルミだったが、次には色ごとの話を聞いても笑ってはならないとされた。オキクルミは耐えていたが、つい少しだけ笑ってしまった。腹を立てたオキクルミは、秘かに人間界へ降りることにした。そのとき、自分の脛を裂いてそこに穀物の穂を隠し、天界を出ようとした。そのとき、イヌがこれに気づいて騒いだので、オキクルミはイヌの口に灰を投げ込んだ。このためにイヌは口がきけず吠えるばかりになった。（金田一 1914）

これとよく似た十勝地方芽室町毛根の話では、穀物を得てくるのはサマイクルであり、穀物を入手する場所は「日本内地」となっている。

サマイクルが、アイヌに穀物を播かせたいと思い、日本内地から種を盗んで来ようとしたが、イヌがそれを見とがめて飼い主に告げた。サマイクルは怒って、イヌの口をイケマでなぐったため、それ以来イヌは口がきけなくなった。（吉田 1957）

いずれの地域でも、穀物が天界や異民族の地など異界からもたらされている点、その際にイヌが関与している点は共通している。穀物盗みの話が、台湾、チベット、インドネシア、アフリカなどに分布することは以前からよく知られており、更にイヌが関与する例も

多く「麦盗みと犬」という類型も立てられている⁽⁵⁾。次に『日本昔話通観』各巻を元に、本州の「穀物盗み」譚を拾い、主人公と穀物の入手先、() 内に伝承地を示した。

- ・天神の娘：天界からキビを（沖縄宮古）
- ・大国主：唐からコメを（岩手）、天竺からコメを、キツネの助力を得て（山形）
- ・弘法大師：天竺から（山形・島根）、シナからムギを、イヌに吠えられる（群馬・熊本）、
百済から麦を、途中イヌに吠えられる（島根）、
中国からムギを、イヌに吠えられる（栃木）
- ・釈迦：中国からムギを、途中イヌに吠えられる（群馬）
- ・釈迦と弘法：協力して田をつくり弘法が人間のために稲を盗む（奄美大島）
- ・稲荷：唐からムギを、途中イヌに吠えられる（群馬）
- ・稻含：印度からコメを（群馬）
- ・水戸黄門：ムギを、途中イヌに吠えられる（群馬）
- ・不明：中国から足の裏を裂いて種を、途中イヌに吠えられる（群馬）

これらを見ると、行為者も入手先もバラエティに富んで興味深い。行為者には、神格や実在の人物が含まれ、後者も（例えば釈迦が日本に来るなど）史実とはかけ離れた行動をとっており、神格化されている。また、穀物の入手先は天界および異域だが、どちらも語り手や聞き手にとっては直接見聞することなく想像するほかない世界で、実質的に天界などと変らない場所であったろう。したがって、これらの物語は、神格化された男性が異界から穀物をもたらしたという共通の構成を持つのである。

4-3. 巨神による国土創造

創世の話はいくつかのパターンがあり、男神が1人で作る話、男女の神が協力して行った話などがある。女神が登場する話では、男神が創った東南部はなだらかなのに対し、女神は怠けていて時間が無くなり慌てて急ごしらえしたため、女神が創った日本海沿岸は急峻な地形になっているとして、危険な地形というネガティブな要素を女性に結びつける内容となっている（稲田・小澤 1989b：412）⁽⁶⁾。

男神が1人で作る場合は、南西部ではコタンカラカムイと呼ばれ、北東部ではサマイエクルと呼ばれることが多い。樺太についてはそれほど記録がないが、金田一京助のフィールドノート⁽⁷⁾に「kotankarape」という名で出てくる。東海岸小田寒か白浦での聞き取りと思われる。この神名は、ドブロトウヴォールスキーの辞書にも「kotan karappye 創造主、神」として記されている（寺田・安田 2013：229）⁽⁸⁾。

以下に金田一の記録の該当部分を引く（●は判読不能部分）。

kotankarape（天地創造の神）この神 ●うごかせば 地震となる たまつてると
この国作り くじらの頭 蓬 noya へさしてやいた おれて おちると おどろいて

尻もちついたあと hunup kipiri にあり toi した ポンノオコイマしたあと 小さい水になった【中略】ushkuikoh (あな) 尻持ちの跡 食ってねたときあたまおい
たあと 手おいたあとあり porokoh といふ。

北海道では、地下には大魚がおり、体を動かすと地震が起こると言われてきた。平取町二風谷などに創世神がこの大魚を抑えているという伝承もあり、上記の「●うごかせば地震となる」はこれに対応する内容と考えられる(稲田・小澤 1989b: 412)。クジラの頭を串に刺して焼き、串が燃えて折れたのに驚いて尻もちをついた、その後が湾になった、といった伝承は北海道各地に見られ、焼串が岩となっているという伝承も多い。hunup は東海岸新聞付近の地名であり、ここにも同様の伝承があったことがわかる。小便をした跡が沼になったという伝承も、次の朝鮮、日本にも共通して見られるモチーフである。

朝鮮半島慶南泗川郡では、天から降りた巨神が山川を創った様子が次のように語られる。

地上にいまだ、山、川、海、平原などが形成されていなかった時の事、天の主の娘が指輪を落とした。それは地上に落ちたので、1 人の大将がこれを探す命を受けて降り来た。地上に降りてみると、そこは泥田のようだったので、指輪はどこにも見当たらない。そこで大将は大きな手で泥を探り、泥土をわしづかみにしたところは山になり、手のひらで撫でたところは平原になり、掘り返した所は海となり、指でかいた所は川になった。(孫 1930)

ほかに慶北達城郡の伝承としては、むかし巨人がその大ききの為に国を追われ、飢えて大量の水を飲んだ。すると腹が下り、大量に排泄した便が白頭山などの山々となり、小便は豆満江などの川になった、という話もある(孫 1930)。

本州では、弘法が世界を創ったとする話が岐阜県にある(稲田・小澤編 1980d: 512)。柳田国男が集成したダイダラ坊の伝承なども、山を作ったり、手や足、尻をついた所が窪地や沼になっている点、小便が河川(香川県大東川)になったという点が朝鮮やアイヌの巨神伝承に共通する。

4-4. 人間創造

人間創造の伝承について、北原(2014)では、昼と夜の神が土で形を作り創世神が魂を込めた(美幌町)、神々が相談してハルニレから作り神との間に子孫を増やした(鶴川町春日)、青草から作った(新ひだか町三石)、シラカバとハルニレが夫婦になって人間が生まれた(新ひだか町三石)という事例を紹介した。また第3節④のように犬祖説話もある。

次に見る2篇は、これらとは少々雰囲気異なり、別系統の伝承だと思われる。1つは知里の「アイヌ艶笑談」に収録された登別市幌別での創世神コタンカラカムイの伝承である。創世神が国土を造り動植物や魚や虫を造り、最後に人間を造った。その際、人間の生

殖器を体のどこにつけるか悩み、カワウソを天界に派遣して、天の神に伺いを立てた。天界では「額のまん中につけたらよかろう」と答えたが、カワウソは天で聞いたことを全て忘れ「男でも、女でも、股間に設けるのが、いちばん具合がよろしいそうです」と、複命したので、今のように人間を造ったのだという（知里 1937：221）。

いま1つ、釧路地方の鶴居村では、神様が人間を創造した時、額に生殖器をつけた。それはあまりよくなかったので、次に脇の下につけた。これもまだよくないということで、股の間に付け、神々が相談してここに決めることにしたと語る（北海道教育委員会 1999）。

これと似た話が朝鮮、台湾、沖縄と本州に分布している。1例として、孫（1930）から朝鮮の「性器の由来」を引用する。はじめ、人間の性器は男女とも額についていたが、非常に道徳が乱れたので、2人の「瞳子神（以前は両肩の上に、今は両目の中にいる神）」が相談し、今の口の位置まで下げた。ところが、鼻が「くさい」と不平をいうので、臍の所に移した。しかし、今度は下肢から不満が出て「貴いものを上体の方にばかり置くのは不等だ」ということで、今の位置に落ち着いた。口のまわりにヒゲが生えるのは昔の名残、臍も生殖器を取り除いた名残だという（後略）。

なお、アイヌの伝承にはカワウソが登場したが、栃木では釈迦とあまのじゃくまたは天照皇大神、他の地域は神様とあまのじゃくが登場する。あまのじゃくは取り決めの際に混乱を引き起こし、あるいは結果的に正しい結末を導くという点で、アイヌ伝承のカワウソと対応する位置にある。

4－5. 子作りの掟

次に見る例も、創造神による生物創造譚に続く内容を持つが、やはり土などから人間を造ったとする人間創造譚とは独立した内容に感じられる。

生物たちが創世神コタンカラカムイの元をおとずれ、繁殖期を決めていた。ウマが来て「お前は春に」と告げられると、喜んで跳ねて帰った。そのとき、ひづめが跳ね上げた土が創世神の目に入った。そこへ人間が来て「私はいつがいいでしょう」ときいたので、創世神は「いつでも勝手にしろ」とどなった。そのため、人間には定まった繁殖期がない（登別市幌別 知里 1937：221）。

この話も類話が多い。登場する神格は釈迦（山形・静岡）と神様（岩手・長野・東京・京都・岡山・徳島・長崎・沖縄・朝鮮）である。

4－6. 愚兄賢弟

アイヌの兄弟譚は、第3節の⑥、⑦で例示した。北海道東北部ではサマイエクルが、南西部ではオキクルミが、樺太ではヤイレスーボが優位に立つ傾向がある。

類例として、栃木では、兄弟の猟師が山でお産に苦しんでいる女性（山の神）に会っ水を求められる話がある。兄は聞こえぬふりをするが、弟は矢筒を外して谷川の水をくんでくる。女は姿を変え「自分は山の神だ、お礼に山仕事が無事にできるようにしてやる」といって消える。兄は山で怪我をして貧しくなり、弟は裕福になった。山神講のとき、竹筒に水を入れ、山神に供えて無事を祈願するのはこのためだ、というもの（稲田・小澤 1986a：356）。

また、兄弟譚ではないが、年若い者が親切から幸福を得る話がある。福岡では、弘法が化けた貧しい僧が川を渡してほしいと頼むが、渡し賃を持っていないのでどの船頭も断る。若者が事情を聞いて渡してやると、僧は芦の葉を川に投げ入れて「えつ」という魚に変え、それを取って暮らす様に教えた（稲田・小澤 1980b：338）。後半は、神がヤナギの葉からスサム（柳葉魚^{ししやも}）を作り出したというアイヌの伝承とも類似して興味深い。

4-7. その他

その他、人格神が登場するものではないが、事象の起源を語る伝承で、内容が共通するものを2篇紹介する。

鹿児島県の大島郡宇検村生勝では、神が天からイヌを降ろした時に、イヌの足が一本足りなかったので泥で作り足した。イヌは小便するとき、泥製の足が崩れないように足を上げるようになった、という伝承がある。同じ大島郡の瀬戸内町節子では、穀物盗みの伝承にこのモチーフが加わり、イヌが弘法にうるさく吠えたので弘法がイヌの足を叩き折る。釈迦がこれをたしなめたので、足を泥で作ってやったという筋になっている（稲田・小澤 1980c：853）。

この類話として長崎では殿様が、熊本や長野、岐阜、山梨ではやはり弘法がイヌの足を補った話があり、釧路ではオタストUNKルの伝承として伝えられている。

また、セキレイはアイヌの伝承では創世神を助けた鳥とされるほか、人間に性交を教えた神ともされる（稲田・小澤 1989b：705）。栃木県では、男女の神がサルの抱き合う様子をまねて性交が起こったという伝承があり、別伝として屋根の上で尻尾を動かすセキレイの動きをまねて性交が始まったというものがある（稲田・小澤 1986a：332）。

まとめ

以上の諸例を元に、整理と考察をする。冒頭で述べたように、アイヌの人格神伝承は内容が多岐にわたり、時として登場する神格の名も異なっている。先行研究では、それぞれの名で呼ばれる者を別の神格と考えた上で、習合と分化の2つのモデルが立てられた。

第3節、第4節で見たように、人格神の伝承には、愚兄賢弟、巨神、降下と退去、姉に養われる孤児など、共起しにくい（1つの神格の話としては矛盾を起こす）属性が含まれ

ている。また、第4節では「神女との婚姻（天人女房）」、「穀物盗み」、「巨神の天地創造」、「子作りなどの摂理創造」、「愚兄賢弟」といったモチーフは、本州、琉球、朝鮮、中国などに共通して見られる物であることを確認した。特に天人女房と穀物盗みはユーラシア南部を含む非常に広い地域に見られる。他のモチーフについても、資料の整理と比較研究が進めば、より広いつながりが見えてくることが予想される。

先行研究でも、アイヌと近隣の類似した伝承のうちには、南方から伝播したものがあると考えられてきた。朝鮮半島の古代国家はトゥングース系の諸民族と深いつながりを持っていたことを考えれば、アムール河流域から樺太へ、という北方ルートも検討すべきだが、いずれにせよこうした類似性は伝播による結果と解するのが妥当であろう。いうまでもなく、それぞれの土地にはそこで生み出された伝承が多くあり、今もあるに違いない。一方で、聞き手を引き付けるモチーフ、ストーリーが広く伝播し、それがそのまま、あるいはモチーフの単位で取り入れられているのであろう。

各類話において主要な役柄は「神」、「オオクニヌシ」、「釈迦」、「弘法」、「水戸黄門」など、それぞれの伝承地において優勢な神格や伝説的人物が担っている。これら物語の中心となる神格は、いわば可変項であって、話型やモチーフが伝播した際に在地の優勢な神格に置き換えられたのではないかと。興味深い話に触れたとき、耳慣れない神・偉人の話よりも在来の神格の話として解釈する方が、語り手・聞き手にとって自然に感じられたであろう。更に、時代とともに信仰が変化すれば、同一地域内でも物語の中心となる神格が交替することも考えられる。アイヌ社会においても同様の過程を経て、伝播したモチーフが在地の神格に取り込みや交替が起こった結果として複雑な分布を呈したのではなかろうか。

また、創世神のような「巨神」のイメージは、アイヌの伝承全体の中ではやや浮いた存在であり、話型とともにその神格も取り入れられたように思える。

以上をまとめると、アイヌの人格神伝承は、在地の神格・伝承に「巨神」、「文化創造」、「神女との婚姻」といった様々な外来の話型・モチーフが取り入れられつつ形成されてきたと考えられる。樺太や北海道北東部では神格の習合が起こり、ヤイレスーボやサマイエクルが様々な顔を併せ持つに至ったと考えられる。これに対し、北海道南西部では、文化神と兄弟神の習合は見られるが、創世の巨神は別な神格と見なされている。

本稿では、紙幅の都合で英雄詞曲については十分取り扱えなかった。奥田（1996）では、釧路地方における英雄詞曲の主人公が、人格神的な性格を帯びていることが指摘されている。本稿準備の過程において、噴火湾付近から登別市にかけての地域では、祈り詞の中に英雄詞曲の主人公の名前が引かれ、文化創造者として言及される例があることを知った。こうした、人格神と英雄詞曲の主人公との接近については、機会を改めて検討したい。

注

- (1) 美幌町でサマイクル、八雲町でオйнаカムイ、平取町でオキクルミに祈る例があるが、全体としては非常に事例が少ない。この理由については、松村（2013）の考察が示唆的である。松村は、世界の神話に天空や天空神を題材にしたものが少ない事に触れる中で、神話が少なくこと関連し天空神への儀礼が少ないとも述べている。その要因は「心理的な時間意識」だという。一般に祭祀の対象となるのは同時代の生活に直接恩恵を与える神々であり、天空は世界を構成する物として重要だが、いちど完成してしまえば（世界の秩序ができてしまえば）それ以上の役割を感じにくいとして、「神話の時間意識の中で、天空と天空神は役割を果たし終えた太古の遠い存在でしなくなってしまう」という。

アイヌ文化における人格神が祭祀対象とならない理由も、ここにあるように思える。人格神は、世界・人間・文化の創造を通じて世界の秩序を完成させた。そうした伝承は、人々の生活のなりたちを説明する点においては重要だが、できあがった世界における生活の安寧までは関与しない。現実の生活に関する祈願は、人間と直接接する自然神に対して行われるので、人格神たちは（今でも生きているとされるけれども）役割を終えたことになるのだろう。人格神の伝承はいずれも起源（＝古代）に属するもので、地上での偉業の説明に続いて必ず「退去」が語られる。退去の語りは、人格神が役割を終えたことが暗示し、これによって人格神と自然神の信仰が矛盾なく接合されるのだろう。

- (2) 前掲の松村（2013）は、創世神話の類型として「世界巨人型」、「潜水型」、「宇宙卵型」、「世界両親型」を立てている。「世界巨人型」とは、原初に存在した巨人の体から世界が作られたとするタイプで、中国の神話に登場する巨人「盤古」、古代インドの巨人「プルシャ」、バビロニアの女神「ティアマト」、アイスランドの巨人「ユミル」などが知られる。日本では、イザナギが川で身体を洗うと右目から月の神ツクヨミが、左目から太陽の神アマテラスが、鼻からはスサノオが生まれたとされているが、これも「世界巨人型」的な神話とされる。
- (3) 立石は中国の小鳥前生譚に、家族を虐待した罰として鳥になるという「加害」の要素を持つ話が見られる述べる。アイヌの小鳥前生譚にも、老親に魚や肉の美味い所を食べさせなかった兄妹が鳥に変えられるという話の新ひだか町静内や平取町にあり、静内のある話では兄はヤマゲラ、弟はクイナ、妹はアオバズクになる（稲田・小澤 1989b：962）。また、祖母の世話をせず死なせた子がアカゲラになった話がある。また、盲目の兄が弟をうたがって鳥になる話が、アイヌにも本州にもあるが、立石によるとこの話は中国にも見られるようである。
- (4) 孫（1930）をはじめとする、植民地期に刊行された朝鮮の文学や民俗に関する書籍については、金廣植らによる詳細な研究がある。
- (5) 例えば大林（1973）など。

- (6) 魚の神にも、夫婦の神格とする伝承がある。この場合、神の倉の戸を女神が閉めると魚が少ないが、男神が戸を閉めると閉め方が雑なので、たくさん魚がこぼれだし豊漁になるという。女神に対して男神の方が粗雑だというものだが、それが豊漁という人間にとっての吉事につながっている点で、創世神話とは逆の結末につながっている。
- (7) 同資料は北海道立図書館にマイクロフィルムの形で収蔵されている。資料番号 M419。
- (8) 同書には「kotan kara-kamoj 神、仏陀」という語も記載されている（寺田・安田 2013：229）。北海道と同じ形の神名があったことが知られるとともに、仏陀に創世神のイメージが有ったことがうかがえ、興味深い。

参考文献

- 石田有沙 2011「日本史における犬のイメージについての研究」『寧楽史苑』56号、奈良女子大学史学会。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1978a『日本昔話通観第18巻 鳥根』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1978b『日本昔話通観第21巻 徳島・香川』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1979『日本昔話通観第22巻 愛媛・高知』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1980a『日本昔話通観第24巻 長崎・熊本・宮崎』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1980b『日本昔話通観第23巻 福岡・嵯峨・大分』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1980c『日本昔話通観第25巻 鹿児島』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1980d『日本昔話通観第13巻 岐阜・静岡・愛知』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1981『日本昔話通観第12巻 山梨・長野』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1985『日本昔話通観第3巻 岩手』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1986a『日本昔話通観第8巻 栃木・群馬』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1986b『日本昔話通観第6巻 山形』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1989a『日本昔話通観第27巻 補遺』同朋社出版。
- 稲田浩二・小澤俊夫（編）1989b『日本昔話通観第1巻北海道（アイヌ民族）』同朋社出版。
- 稲田浩二ほか（編）2011『世界昔話ハンドブック』三省堂。
- 弥永信美 2002『大黒天変相』法蔵館。
- 奥田統己 1995「織田ステノの英雄叙事詩」『口承文芸研究』18号、日本口承文芸学会。
- 奥田統己 1996「アイヌ口頭文芸「聖伝」をめぐる」『口承文芸研究』19号、日本口承文芸学会。
- 奥田統己 2008「アイヌの英雄叙事詩における英雄像の地域差」
- 奥田統己『ユーラシア言語文化論集』11号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座。
- 大林太良 1973『稲作の神話』弘文堂。
- 帯広市教育委員会（編）2015『吉田巖資料集-33 アイヌ調査書附録・附録その三』。
- 川田順造 2001『無文字社会の歴史—西アフリカ・モシ族の事例を中心に—』岩波書店。

- 北原次郎太 2014『アイヌの祭具 イナウの研究』北海道大学出版会。
- 北原次郎太 2017「アイヌ口承文芸に見るシャマン儀礼の再検討」『口承文芸研究』第40号、日本口承文芸学会。
- 北原次郎太 2017「東アジアが誇る笑い話？ パナンベ・ペナンベの謎（上）」『月刊シロロ』12月号、（一財）アイヌ民族博物館。
- 北原次郎太 2018「実はとってもえらい神？ パナンベ・ペナンベの謎（下）」『月刊シロロ』1月号、（一財）アイヌ民族博物館。
- 金広植 2014『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究 帝国日本の「学知」と朝鮮民俗学』勉誠出版。
- 金田一京助 1993（1914）『金田一京助全集 アイヌ文化・民俗学』第12巻、三省堂。
- 金田一京助 1993（1923）「アイヌ聖典」『金田一京助全集 アイヌ文学V』第11巻、三省堂。
- 金田一京助 『金田一京助ノート』（フィールドノート・未公刊）北海道立図書館蔵。
- 切替英雄（編・訳）2004『知里真志保フィールドノート（3）』北海道教育委員会。
- 更科源蔵 『コタン探訪帖』1～20（フィールドノート・未公刊）弟子屈町図書館蔵。
- 関敬吾 1981「解説」『アイヌ民譚集』岩波書店。
- 孫晋泰 1930年『朝鮮民譚集』郷土研究者。
- 立石展大 2004「日中「小鳥前生譚」の比較研究」『口承文芸研究』第27号、日本口承文芸学会。
- 知里真志保 1975（1952）「呪師とカワウソ」『知里真志保著作集』第2巻平凡社。
- 知里真志保 1981（1937）『アイヌ民譚集』岩波書店。
- 寺田吉孝、安田節彦 2013「M.M. ドプロトゥヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典（15）」『北海学園大学学園論集』171。
- 中川裕 1997『アイヌの物語世界』（平凡社）。
- 北海道教育委員会 1999『八重九郎の伝承 7』アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズXⅦ。
- 松村一男 2013『この世界のはじまりの物語』白水社。
- 三浦祐之 1996「ワオとマオーアイヌと東北と」『口承文芸研究』日本口承文芸学会。
- 吉田巖 1916「アイヌの植物説話」『人類学雑誌』31巻4号。
- 吉田巖 1957『愛郷譚叢』帯広市社会教育叢書第3巻、帯広市教育委員会。
- 依田千百子 1982「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』5号、日本口承文芸学会。
- 米田優子 1995「アイヌ農耕史研究にみられる伝承資料利用の問題点—穀物の起源説話に関する検討を中心に—」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』1号。
- （きたはら・モコットウナシ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター）